

第三節 魚雷追躡監的諸施設

第一項 魚雷追躡監的用船艇

魚雷追躡監的ノ爲使用セラレタル船艇ハ當初ハ速力數節ニ過ギザル艦載若クハ鎮守府所屬陸應部隊ノ機動艇ニ過ギザリシガ富士、八島ノ回航以來艦載雷水艇ヲ利用スルニ及ビ稍舊態ヲ革ムルニ至レリ唯驅逐艦水雷艇ニアリテハ概ネ當初ヨリ自艦艇ヲ以テ之ニ任ズルヲ例トセリ

然ルニ明治四十年以後加熱魚雷現ハレ加熱噴水魚雷トナリ亦四十五浬徑ヨリ五十三徑トナリ駛走距離ノ遠大、雷速ノ急進、射場ノ擴大等ハ艦載水雷艇ヲ以テスルモ尙不足ヲ痛感スルニ至リ大正ニ入りテハ軍艦編隊發射等ノ際ハ概ネ驅逐艦ヲシテ追躡セシメシガ而カモ驅逐艦ノ燃料及行動等ニ掣肘セラレ一般の常用手段タラシメ難カリシヲ以テ茲ニ高速内火艇並ニ次期航空機等ヲモ併用スルニ至レリ

世界大戰開始前後ヨリ内火式機關ノ發達利用ヲ見我國ニ於テモ小船艇ニ漸次其ノ利用ヲ見シガ大正五年五月海軍教育本部長ハ海軍大臣ニ上申スルニ潜水艇攻撃法研究及魚雷追躡監視ノ爲高速内火艇備付相成度件ヲ以テセシカバ大正六年三月其ノ八隻ヲ建造スルコトトナリ（五〇呎、三十節、要目詳細別表）當時之ヲ軍艦ニ搭載セシムル計畫ナリシガ翌七年九月之ヲ海軍工廠ニ附屬セシメ必要ニ應ジ艦隊又ハ水雷學校ニ供用セシムルコトニ改メタリ

大正九年第二艦隊ニテ廣島灣ニ於ケル發射ニ於テ實地ニ使用セル實驗報告ニ略ルニ本型(五〇呎)高速内火艇ノ魚雷追躡監視用トシテノ價值ハ蓋シ偉大ニシテ該内火艇ヲ有セシガ爲發射魚雷ノ失綜沈沒等ヲ免ガレタルコト一再ニ止マラズ將來此種艇ヲ軍艦ニ搭載シ隨時使用シ得ルニ至ラバ魚雷發射訓練上甚大ノ利便アルモ船體薄弱時々漏水ヲ生ジ三以上ノ風波アル時ハ使用困難ニシテ其ノ能力寧ロ艦載水雷艇ニ及バズ二十五節内外ニ其ノ速力ヲ低下スルモ船體ノ一層強固ニシテ耐波性ノ一層大ナルヲ有利トセシガ不取敢同年度ヨリ艦隊ニテ利用セリ(本型以前ニ於テ已ニ若干ヲ購入製作セルハ別表ニ見ルガ如シ)

(參考)

大正十一年教育本部長提出所見中左記一項アリ

近年魚雷射程ノ延伸ト就役艦數ノ増加ニ伴ヒ追躡監視用舟艇ニ甚シク不足ヲ感ジ常設射場亦狹隘ニシテ發射實施ヲ著ルシク困難ナラシメツアル實狀ナリ高速内火艇ノ増加ト射場ノ整備及増設ニ關シテハ特ニ當局ノ考慮ヲ望ム

大正十二年横須賀工廠ニ於テ「オエルツ」發動機艇建造セラレ從來ノC、M、B型(前記ノモノ)トノ比較實驗アリ大正十四年小演習昭和二年大演習等ニ於テモ使用實驗ヲ重ネ現ニ平時斯種任務ニ使用シ得ルモノ別表各型式ノ整備ヲ見ルニ至レリ

一般ニ斯種内火艇ハ使用當初ハ機關取扱ニ頗ル腐心シ故障續出シ一時其ノ價值ノ如何ヲ疑ガハシムルモノアリシガ用兵、技術兩者ノ不撓ノ研究ニヨリ漸次稱用セラルルニ至リシモノナリ 但シ船體其ノモノノ矮小ナルガ爲到底大正十年以後ノ外洋主義訓練ニ利用セラルベクモアラズ専ラ廣島灣、周防灘

射場ニ於ケル基本的教練發射ニ利用セラレタルモノニシテ戰闘戰技訓練時期ハ専ラ驅逐艦及航空機ヲ以テスル追躡及監視ニ待チシハ論無キ所ナリ大正八年竣工ノ九、七噸型ハ周防灘ノ使用ニ適セザルノ故ヲ以テ大正十四年十八噸型ノ建造ヲ見タリ(別表參照)

別紙

魚雷追躡監視ニ利用セル高速内火艇型式一覽

艇種	排水量 (トン)	製造所	竣工年月	全長 (米)	幅	吃水	速力	馬力	特種裝置	機械種額	記事
交通船	一、七	墨田川 造船所	大正五、二	七、五			三、五	五〇		内火	
同	二、四	同	七、一	九、〇	一、九	〇、一五	三、〇	一〇		同	
魚雷追躡 並ニ交通	二、五	同	七、三	九、二	一、九	〇、一五	三、〇	一八		同	◎ 同型 二隻
交通	九、七	同	八、三	二五、一五	三、〇	〇、六二	三、二	七〇		同	同型 七隻
魚雷追躡 交通	七、〇	菱	三、三	三、八			二、〇	二〇		同	◎
驅潛艇 兼交通	八、七	横須賀	一四、八	二六、七			三、〇	七〇	兵裝アリ	同上	C、M、B型 同型 三隻
同	七、七	横須賀	一四、三	二六、五			三、二	七〇	兵裝アリ	同上	O、M、B型
魚雷追躡	一八、〇	墨田川	一四、三	二五、二			三、〇	七〇		「ローレン」	◎
驅潛艇	一八、〇	墨田川	昭和二、九	二〇、〇	三、九	〇、八	三、〇	六〇	兵裝アリ	「ブリークフォート」 船用機械	

(備考) 一、魚雷追躡主用トシテ作ラレタルハ◎型數隻ニ過ギザルモ其ノ他ノモノモ之ニ流用セラレタリ

二、驅潜艇ノ兵裝、機關及驅潜艇トシテノ使用上ノ價值等ニ就テハ第七編第二章末尾ニ詳記セリ

第二項 魚雷追躡用的用航空機

航空機ハ其ノ視界廣大ナルノ故ヲ以テ魚雷追視的任務ニ堪能ナルベキハ想像ニ難カラザル所ナルガ其ノ通信裝置及能力ノ不充份並ニ飛行機ニ在リテハ其ノ過大ナル速度力ノ調節困難ナル等ノ爲幾分其ノ成果ヲ危マレシガ飛行機ハ大正七年(第四編第三章第三節參照)ヨリ氣球ハ大正十一年ヨリ實用セラレ各其ノ價值ノ至大ナルヲ示セリ

(註) 繫留氣球ハ大正八年度大演習ノ際佐泊灣陸上ニテ膨脹ノ上單艦標名ニ搭載シ兵衛的ニ利用セムトセシモ數日間飛揚後瓦斯ヲ放出セルヲ艦上使用ノ嚆矢トセシガ大正十一年度ヨリ艦隊ニ正式ニ供用セリ而シテ當初ノ主目的ハ彈着觀測ニ在リキ

即チ繫留氣球ニ在リテハ發射艦(隊)標的艦(隊)監的艦(隊)ノ一部又ハ全部ニ揭揚使用シ飛行機ニ在リテハ隨時航空母艦航空機搭載艦又ハ陸上航空隊ヨリ射場ニ飛來シ各其ノ任務ヲ行ヘリ然ルニ輓近飛行機通信能力ノ増進特ニ繫留氣球ニ比シ一層廣正面ノ魚雷監視ニ便ナルト隨時隨處ノ活動ニ堪フルニ至リシニ對シ繫留氣球ハ其ノ命數短少、保存亦容易ナラザルト高速力航行中ノ隨時ノ揚卸ニ不便ナル等ノ爲專ラ靜的ヲ用フル基本的發射ニノミ使用セララルルニ至レリ

(參考) 氣球ノ監的能力概ネ左ノ如シ(魚雷航迹視認距離ノ平均ヲ示ス)
高度四〇〇米乃至五〇〇米

迎視	追視	状態 天候、視界
八、〇〇〇—一三、〇〇〇	一〇、〇〇〇—一五、〇〇〇	良好ノ時(米)
六、〇〇〇—一〇、〇〇〇	七、〇〇〇—一〇、〇〇〇	普通ノ時(米)
三、〇〇〇—五、〇〇〇	三、〇〇〇—五、〇〇〇	不良ノ時(米)